

修驗恵印灌頂について

八 田 幸 雄

一 研究方法

本研究は『修驗最勝恵印三昧耶極印灌頂法』（『日藏』46・21）に伝えられる、滅罪、覚悟、伝法の修驗の重要な儀礼である灌頂の意義を明らかにしようとするものである。

そのためには右の三灌頂の諸作法を、恵印法流の基礎となる真言小野流に伝わる伝法灌頂の諸作法と対比し、異同特質を明らかにしていかなければならない。小野流の伝法灌頂の作法としては勸修寺刊行の栄海式『三昧耶戒』、『伝法灌頂』（金・胎）の次第があり、これは内容が詳しくてよい資料である。しかし小野流の当初の伝法灌頂の構造を知るためには、小野六帖や、更にはそのもとなつた『大日経』、『略出念誦経』、『無畏三藏禅要』、『受菩提心戒儀』（以上何れも大正藏経十八巻）をも精査し、伝法灌頂の基本構造をよく把握しておくなければならない。以上の密教経軌等によると密教の伝法灌頂は、深秘の法の伝授とともに、滅罪と発菩提心を再確認する三昧耶戒が併せて重要な儀礼となつている。それは修驗の滅

罪と伝法の二灌頂に相当する。覚悟灌頂は修驗独自の内容を持つ灌頂である。以下そのことについて明らかにしていこう。

二 滅罪灌頂

修驗の滅罪灌頂は密教の三昧耶戒に相当する儀礼とみてよい。この灌頂は垢穢に満ちた身心を浄化して、次の竜樹の世界を体得せしめる覚悟灌頂の下準備の儀礼とみられる。身心を浄化するためには滅悪趣菩薩のマンダラを觀じ、真言密教の金剛界法に出る摧罪等の印言をもつて煩惱罪障を除去させようとするのである。

滅悪趣菩薩を觀する根拠は『大日経』に除一切蓋障三昧に入ること（大正18・1・c）『無畏三藏禅要』に一切蓋障三昧を得ること（大正18・945・b）、また護摩法に身心を浄化するために『瑜伽護摩儀軌』（大正18・919・a）に滅悪趣菩薩を、小野の『大日護摩』にも滅悪趣菩薩等が示されていることによる。また三昧耶戒を継承したものと見られるものに『恵印灌頂受者加持法』（『修驗聖典』278）がある。これは恵印灌頂を授

けるに先だつて受者加持の方法が記されたもので、その内容は三帰依、発菩提心、三昧耶戒、外五古の印言の授与、四重禁戒（不捨正法戒、不捨菩提心戒、不捨怪格戒、不捨有情戒）の受持、五大願（衆生無辺誓願度……）の再確認等をさせるのである。

この『惠印灌頂受者加持作法』の戒は『大日經』（大正18・40・a）や『略出念誦經』（大正18・252b）に基づくもので、それはまた東密の三昧耶戒の重要な部分となつてゐる。またこの受者加持の作法は『峯中正灌頂作法』（『修驗聖典』130・131）の中に、そつくり取り入れられてゐる。このような受者加持の作法が修驗の灌頂を行う際になされたのは、後世の附加か、当初からあつたのかは明らかではないが、東密の、しかも小野流の伝法灌頂の三昧耶戒の作法の一部がそのまま修驗の灌頂に採り入れられてゐることは興味の深いことである。

次に滅罪灌頂が東密の灌頂と異なる点についてみていきたい。修驗惠印法流は金胎不二の大日を教義の中心とするから、儀軌、マンダラも金胎不二の立場を貫いていく。滅惡趣のマンダラは、中尊が滅惡趣（除惡趣、除一切惡趣ともいう）を中心に、胎藏マンダラ除蓋障院の九尊をもつてマンダラの主要部を構成し、それに金剛界マンダラの内外の八供、四摂の十二尊を金剛界マンダラの配位によつて配し、更に八護方神の男女神を配してマンダラを組織してゐるのである。『日藏』46・22）これは滅惡趣尊を通して蓋障を消滅し、八供四

摂の功德によつて救済され、八護方神によつて清淨心が護持され、ここに金胎不二の世界が体得されることを示そうとしたものなのである。

このことは滅罪灌頂の次第においても同様のことが見られるのである。『極印灌頂三祇師補闕分軌』（『日藏』46・89）によれば滅惡趣等の九尊については『胎藏法』の除蓋障院に出る各尊の真言が説かれてゐる。それに『金剛界法』に出る金剛眼、召罪、摧罪、業障除、成菩提心の印言が出る。これ等は心眼を聞き、心内の罪障を引き出し、惡趣を打ち碎き、一切の行為を淨化し、光輝ある普賢の人格を身につけさせようとする作法で、すべて金剛界法に出るものである。このように修驗の滅罪灌頂の作法は、金胎両法の懺悔、除蓋障、煩惱摧破の作法を通して、身心を淨化し、滅惡趣の精神を体得し、ここに始めて竜樹の淨土、覺悟の世界に入ることが出来るのであるとする。

三 覺悟灌頂

覺悟灌頂は修驗独自の灌頂であつて、修驗の特色はここに見られる。特に登覺台、仏果輪縁、度欠思議、入門印、合門生、大智惠印、環輪円成印、更には修驗の立場からの無所不至の印言が示されている。これ等のものは修驗の結縁灌頂や、三昧耶供養法の次第にも出るのである。

覺悟に示されたマンダラは竜樹マンダラである。『極印灌

頂法』(『日藏』46・24)に示されたものを見ると、中尊は竜樹、その廻りに深沙、弁天、慈氏、法喜が配され、その外側には八金剛童子が配されている。このマンガラは何を表わそうとしているかについて、若干の考察を進めてみたい。

修験の儀軌類は竜樹をどのように捉えているかと見るに、『大峰道場莊嚴自在儀』(『日藏』46・61)では、竜樹は修験の法を小角、聖宝に吾げ、竜樹の教えは都率天に生じ、竜樹の宝篋を開けば密嚴、華嚴界を現じ、本有修正の宝蓮華台の証得は大峰都率天の内宮に至る(趣意)といい、『靈異相承恵印儀軌』(『日藏』46・71)は竜樹は身色白肉にして五如来の宝冠を得て、理智俱密(金胎不二)の妙理を説き、西方浄土に在りと説く。そして竜樹の世界は竜樹マンガラを観することによつて、自己の内面に体得出来ることを説く。『三祇師補闕分軌』(『日藏』46・89)は山伏の系筋は竜猛(竜樹)より直に尊師(聖宝)に至ると説き、『恵印灌頂三尊法』(『修験聖典』247)は七宗には最高の高祖、真言には第三の大聖なりとし、『修験恵印総漫拏羅』(『日藏』46・250)には竜樹大士の心藏の秘説なりと示され、『修験最勝恵印三昧耶法玄深口決』(『日藏』46・117)には顕密併教の尊と説いている。

今これ等の説から見るに、竜樹の信仰は、大峰修験の深層性と多様性を内包していることが知らされるのである。古くは弥勒信仰があり、都率天往生を通して弥勒下生を願い、そ

れが密教の即身成仏の信仰と結び合っていること。それがやがて阿弥陀信仰と結びつき竜樹の浄土は西方極樂界にあると示されたこと。また雲上高い都率天浄土を大峰山上に具体化したこと、そしてこの大峰を弥勒の浄土とするともに、そこに生れる人格体を南都大乘仏教の教学の始祖、竜樹をもつて示し、竜樹を妙雲相如来(『修験聖典』195)と崇拜する。ここにも雲上の神格として大峰山上をよく表現しているが、この妙雲相という語は、仏法を雲にたとえた法雲 dharmamegha から来たことで、その用例は『華嚴經』(大正9・76上)『八十華嚴』(大正10・418中)に出るといふ。(中村元『仏教語辞典』一二八八)このように見ると大峰山の信仰には弥勒信仰があり、それはまた法相宗の教義と関連し、竜樹信仰は南都仏教の共通の祖である竜樹と関わりとともに華嚴の教義と関係する。そのことは興福寺、東大寺の系統の修験集団の関連を意味する。そしてまた南都仏教は法華懺法を重視するから、修験の教義には当然に法華の思想が混入する。このような地盤の上に東密、台密の思想が覆つて平安密教に塗りつぶされてはいく。しかし根底には南都仏教の修験の伝統が厳然としてあり、それが常に修験の独自性を保とうとして、竜樹法やマンガラを作成し、修験は竜樹の正嫡とさせようとするのである。

このことを念頭に置くなら竜樹マンガラの示す内容もよく理解されよう。竜樹を取り巻く、慈氏は弥勒信仰を、法喜は

葛城山の神格であり、小角の象徴である。弁財は吉野川、熊野川、宮川の分水の峯であり、水神の源であることを示し、深沙は山の守護神である。八金剛童子は金剛藏王の護方神であるが、これは密教の八護方神の変形と見做すことが出来る。金剛藏王は修驗独自に案出された密教の教令輪身に相当する尊である。したがって修驗惠印の不二大日といつてもそれは単に平安密教の教理のみではなく、古く南都仏教の諸思想を含んだものである。この点修驗惠印法流は真言小野流と異つた性格を持つているのである。

四 伝法灌頂

覚悟灌頂を受けて竜樹の浄土を体得したものは、それはそのまま全胎不二の大日の世界を証得し、修驗の世界の秘奥を極め得たものとして伝法灌頂が授けられる。『修驗極印灌頂法』の次第は簡略すぎて内容がはつきり分らない。そこで『修驗極印灌頂法秘口決』（『日藏』46・161）を参照してみるとする。この『口決』によれば灌頂道場は屏風をもつて道場を仕切り、受者はこの中で灌頂を授かる。そこでは密教の灌頂と同様に玉冠、五古印、金篋、明鏡、輪が授けられることになつており、また『惠印灌頂調方并図』（『修驗聖典』337）には天蓋、宝冠、蓮座の図が示されている。これらを見ると修驗の伝法灌頂の儀礼は、全く真言小野流のそれと同じ内容の儀礼であると推察されるのである。

次に伝法灌頂の時に護摩を併せ修するのも小野流と同じである。ただ異なる点は密教の崇拜対象は胎藏又は金剛界の諸尊であるのに対し、修驗のそれは修驗の特性をもつた尊と金胎不二の綜合した尊である。つまり、金剛界³⁷尊に修驗の尊として竜樹、法喜、深沙、弁財、慈氏（以上は覚悟灌頂の尊）、不動、愛染、金剛童子、一乗峰中諸尊、胎藏の普賢、文殊、観自在、弥勒の四尊、天部等の諸尊を加えた大部のものである。これ等の尊を体系的にまとめたものに『修驗惠印総漫拏羅』がある。

むすび

以上修驗惠印法流の灌頂は密教の三昧耶戒、伝法灌頂の儀礼をそのまま受け継いでいるが、新に竜樹の世界を体得させる覚悟灌頂を設けたことにその特色がある。そして表向きには真言密教の教理を採り入れてはいるが、山岳抖擻の練行を通して何れの宗派も超越して、修驗の世界が体験されることを示している。修驗の儀軌の本質は竜樹法にあるとみてよいのである。